
A M 2 4 : 0 0

智明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AM24:00

【Nコード】

N7401B

【作者名】

智明

【あらすじ】

誰かは、待てない。でもあなたなら待てる。

—この仕事が終わったら、飯でもどうだ—

いつもそう、あの人はそう言う。

でも何だかんだ言って、その約束は実現されない。

だから私は頭を下げて、ありがとうございます、と答える。

けれど私は馬鹿だから、というか、あの人が好きだから、いつも期待をしてしまう。

何のためいつもあんな事をあの人が言うのか。未だに理解出来ない。

「で、お前はそうやって待ち続けてるわけか」

「いけないですか」

「別に。待つのもいいと思うぞ」

最近の居酒屋は暗い。わざと照明を落としているのだろうけど、メニューが見にくい。どうも理解できない。

そう、最近は理解できないことばかり、だ。

「ただ、時間は流れるもんだ」

「分かってます」

目の前にいる男だって、良く分からない。

仕事は物凄く出来る。でも、かといって仕事に全てを捧げてる訳でもない。

いつも5時になったら構わず帰るのに、

今日みたいにいきなり夕飯に誘ってきたりする。

お通しに出てきたサラダが意外と美味しい。
しばらく無言で私達は箸を動かしていた。

にぎやかな居酒屋の店内。きつとあの人とはこれないだろう。
ただ向かい合って、同じ食べ物を食べる。
ただそれだけの事なのに。

酒を飲む場所はやけに熱い。外に出る時、ひんやりとした空気に驚かされる。

私はあまり飲まなかったけれど、空気の冷たさは心地よかった。
外は相変わらず様々な明かりが道を照らしている。街灯の必要なんてないくらいだ。

「さ、二件目いくか」

「二件目？明日仕事ですよ？」

「日付が変わる前に帰すから」

「でも」

「居酒屋じゃない、俺は甘いものが食いたいんだ。いいだろ？少しは」

まったく、変なのにつき合ってしまった。けれど、もう、どうでもいい。

この時間だ。今から家に帰っても結局そう変わらない。

「分かりました。でも、日付が変わる前まで、ですよ」
「分かった」

この人を好きになれたら、そんな事をふと思った。
もっと楽になれるのだろうか。辛い思いをしないで済んだのだろうか。

だけど、何かしら傷付く事は変わらないだろう。

二件目のお店は、言葉通り、居酒屋ではなくファミレスだった。
こんな時間だ、客は私達しかいなかった。

「ここのパフェが好きなんだ」

「へえ、以外です」

「よく言われる」

オーダーを取りにきたのはまだ若い十代ぐらいの子だった。
愛想はあまりない。

「なあ、お前婆さんになっても待つのか？」

「はあ？」

「さっきの、食事がどーのこーのっていう」

「ああ・・・。どうだろ、待ってるのかな？」

想定外の言葉だった。

第一誰かを好きになっっている時、

この思いは永遠に続くものだ、私たちは思ってしまう。

そんな事は有り得ないと分かっているながら。

だからある意味、恋愛という感情は未来がないのかもしれない。

思ったより早くオーダーしたものが出てきた。

深夜のファミレスは案外機能的なのかもしれない。

「じゃ、これで帰りますね。先輩も早く帰ってくださいよ」

「ああ、気をつけて帰れよ」

ファミレスを出て私達は別れた。

携帯で時間を確認する。終電には間に合いそうだ。

人通りの少なくなってきた駅前の道を私は一人で歩いていた。

―婆さんになっても―

駅の構内に響く靴音と一緒に、さっき言われた言葉が耳に響く。

婆さんになっても、そんな遠い未来今の私には到底予測などできない。

けれど、あの人を待って年老いてもいいかもしれない。

あの人だから、待っていてられる。

なんて私は馬鹿な女だろう。

けれど、そんな自分が愛しく思えるのも事実だったりする。

―この仕事が終わったら、飯でもどうだ―

今度そう言われたら、どう答えようか。

久しぶりに心が弾んでいるのが自分でも分かった。

視界に時計が入った。

時間はAM24:00を指していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7401b/>

AM 24 : 00

2010年10月10日07時46分発行